扶揺公子（森裟）

野々下　晃
（会員　佐伯市晞干区）

潮谷寺山門から浄修堂参道に沿って小林九左ヱ門の墓碑と並んで超大型の墓碑が立っている。極めて上質の御影石作りで、正面には「智覚院殿量誉慈仙寿心大姉」と浄土宗の㊐号がついた十二字戒名が刻まれ、両側面に享保十五庚戌歳十月十七日と死亡の時が記されている。隣接している九左ヱ門の墓碑には俗名が刻まれているのに、この墓碑にはない。

しかし、一見して權門のそれと頷ける堂々たる墓碑で、寺の口碑には佐伯藩六代藩主毛利高慶公側室の墓と伝えられている。

佐伯市史第四編の㈠人物志には、佐伯藩初代毛利高政公以下三十五名がその名を列ねているが、毛利家にあっては初代高政・六代高慶・八代高標・十三代高範等の方々が毛利姓で挙げられているのに、扶揺公子のみが森裟と森姓を採っている。

なお、裟については高慶公の八男に生まれたが、その生母は当時の藩首席医官であった奥井春沢の娘志幾子で、享保十五年十月十七日城内で裟を出産後死亡したと註釈している。

従って、この二つの史料をつき合せて検証すると、冒頭に掲げた墓碑の主は裟の生母奥井志幾子その人であることが首肯される。

但し、以上の史実についてその整合性を確認するには、前提として奥井家が浄土宗潮谷寺の信徒であることが必須の条件でなければならない。

奥井志幾子墓　潮谷寺境内

潮谷寺墓地は同寺経営の幼稚園舎の南側から、寿屋駐車場を境として南側に約三百坪の広さに開けているが、その園域との境界近くの一区画に、中津留家の墓碑と並んで奥井家の墓碑が立っている。

墓碑には奥井家之墓、初代法心院聰誉諦達居士外累代合葬、享保十年（一七二五）九月晦日卒と刻まれているが、墓形等より推察してそれ程古くないと考えられる。

なお、その戒名の主が志幾子の父奥井春沢であるか否か判らないが、初代が享保十年に没したとある事情から推察すると、奥井家は高慶公の時代に医官として佐伯藩に招聘（しょうへい）されたと考えるのが妥当ではないか。

奥井家累代墓　潮谷寺境内

さて、ここで出生のその日に生母を失うという、数奇な運命を負った扶揺公子―森裝について再録すると、先にも述べた様に、佐伯藩主毛利高慶の八男で幼名を源十郎、後浪江と改めた。

元文三年（一七三八）二月八歳の時、父高慶の供をして入津浦の狩山で狩猟を楽しんだそうだが、銃をよくした彼は自ら鉄砲をとって、狩り出された鹿二頭を斃した。

なお、寛保三年（一七四三）十三歳頃まで佐伯城内に住んでいたが、「騎射剣銃等の技を学ばん」と江戸にのぼり、儒学と漢詩を宇佐美子迪や高野蘭亭等に学んだ。

宝歴七年（一七五七）二十七歳の時、水戸藩の重臣山野辺義胤の養子となり、山野辺図書義方と名乗った。養家山野辺家で二十年間、おおいに楽書を学び音曲の技を磨いた。とくに吹笙は得意であったという。

安永六年七月（一七七七）山野辺家を去り、佐伯藩江戸白銀下屋敷に帰り、これより森氏に復し名を裝と称した。

扶揺公子というのは森裝が扶揺子と号したからで、ほかに壺邱・南豊などの号もある。

当時の藩主は八万巻の蔵書で有名な毛利高標であった。裟はその大叔父に当る。裟の著述は壷邱詩文集のほか、書籍考・樂律考・制度考など四十八部九十一巻におよんでいる。

裟は又、自然を愛し四方に遊び、遊べば必ず詩を賦した。

特に暁嵐の瀧域の絶景を愛して次の様に詠んでいる。

詠浅海瀑布

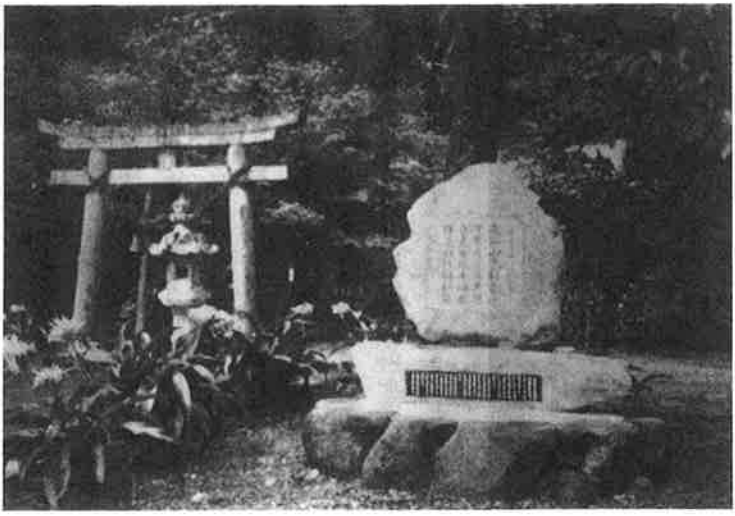
扶揺公子

飛孤山色彩雲邊
下有層崖瀑布懸
自是香爐千仞水
揮毫好作謫仙篇

飛孤の山色彩雲の邊
下れば層崖有り瀑布懸る
自から是香爐千仞の水
揮毫好作らん謫仙の篇

【参考資料】

一、佐伯市史
二、佐伯郷土史後編
三、上浦町の文化財



扶揺公子の詩碑（上浦町文化財より）